

# 京都女子大学図書館所蔵奥浄瑠璃『弘法大師之御本地』

——江戸六段本依拠大師物浄瑠璃末裔——

中 前 正 志

小稿の取り上げる『弘法大師之御本地』（768.5K014 資料ID 1210024225）は、令和三年十一月に東京古典会より発行された『古典籍展観大入札目録』に写真一葉とともに登載され、その直後に京都女子大学図書館に収蔵されることとなった、奥浄瑠璃本である。袋綴写本一冊。縦二七・〇×横一四・〇cm。黄土色無地表紙（本文共紙）の左端中央に外題「弘法大師之御本地」（打付書き）。内題「弘法大師之御本地」。前後表紙以外、四十二丁。段数は、六段。段表示「二たん目」「三たん目」「四たん目」「五段目」「六段目おわりなりだん<sup>（マ）</sup>」。每半丁の行数は、三十四丁表まで七行、三十四丁裏以降は六行。三丁表5行目〜五丁表3行目など、一部に区切り点あり。随所に振り仮名の書込など見られる。本文のあとに、本文と同筆にて「天保五歳／鳥ノ正月吉日」と記されており、天保五年（一八三四）の写本と知れる。また、破損のため裏打ち補修が施されている後表紙見返しにも、本文と同筆の奥書が、

右之通り書おろしなとわ／御座候間ごすいけやうめされ／おんよみくなされ度候

青笹村／ 右衛門

と見える。「青笹村」は、現岩手県遠野市青笹町。

奥浄瑠璃本は、小倉博編『御国浄瑠璃集』（齋藤報恩会、昭14）を初めとして本田安次『語り物・風流二』（木耳社、昭45）や小沢昭一・高橋秀雄編『大衆芸能資料集成』第三卷（三一書房、昭57）、阪口弘之編『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』（和泉書院、平6）、福田晃・神田洋・真下美弥子編『奥浄瑠璃集成（一）』（三弥井書店、平12）に翻刻が集成されているが、それらの中には『弘法大師之御本地』は含まれていない。そして、右のうち『奥浄瑠璃集成（一）』に載る『奥浄瑠璃諸本目録』にも同書は著録されていない。その後も、例えば尾崎修一「新出本 奥浄瑠璃『相洲村松物語』——略解題と翻刻」（『伝承文学研究』58、平21）などにおいて新出本の報告がなされているが、『弘法大師之御本地』についての報告はやはり管見に入っていない。あるいは、成田守『奥浄瑠璃の研究』（桜楓社、昭60）など諸論考にも、それに関する言及は見当たらない。見落としていなければ、小稿の取り上げる『弘法大師之御本地』は、新出の奥浄瑠璃本ということになろう。全文の翻刻を後掲する。

『近松全集』第十七卷（岩波書店、平6）は、「絵入本」として、刊記「享保四歳亥正月吉祥日 うろこかたや孫兵衛板」を有する大東急記念文庫所蔵の『弘法大師之御本地』の冒頭部と挿絵の影印や書誌事項を掲げたうえで、「近松作『以呂波物語』を適宜省略し、六段に分けたものである。段表記を削った後刷本が東洋文庫、東大図書館、天理図書館等にある」と記す。早く若月保治『古浄瑠璃の研究』第二卷（桜井書店、昭19）が、「読本としての刊行にて、太夫名なく」、「加賀掾の『いろは物語』の改作といふよりも縮図である」などと概説した（八二四頁）作品である。デジタル公開されている東大図書館霞亭文庫所蔵本によつて本文を一々照合するに、全体的にほとんど同文と言つてもいいくらいであつて、小稿の取り上げる天保五年写奥浄瑠璃本『弘法大師之御本地』が、上の享保四年板絵入本『弘法大師之御本地』に依拠したものであること、ほぼ明白である。

一例として、奥浄瑠璃本の四段目の冒頭（23オL4〜23ウL2）をまず掲げ、次に、それと対応する箇所を、右享保

四年板本と近松作とされる『以呂波物語』（『近松全集』第十三巻）とから各々引載する。

・かくで、川村金子バ女房をかたわらにまねき、「あの姫君ハ、人間にてわおわすまし」。女房きゝて、「けにや、水からが現世、ミらいのしせうぞや。師匠のおん有故に、親のおんおもしろとかや。ミちをならひて、道ヲ立すハ、ちぐるいなり。其の上、おん身の御しうノ筋、何とぞたすげ参らせん」。

（奥浄瑠璃本）

・かくて、川村きんごハ女房をかたはらにまねき、「あの姫君ハ、人間にてハおわすまし」。女房きゝて、「けにや、水からが現世・みらいのしせうぞや。師匠のおん有故に、親のおんおもしろとかや。道をならひて、道を立すハ、ちくるい也。其うへ、御身のおしう筋、何とぞたすけ参らせよ」。

（享保四年板本）

・あまりの事に女房金吾をかたはらにまねき。「扱有かたやいかさまあの姫は人間にてはおはすまし。神か仏かみづからがげんぜ・みらいのししやうぞや。げにや師のおん有ゆへに親のおんをもしろとかや。道をならひて道を立すはちくるいにひとしかるらん。其上御身のためにはお主すぢ。何とぞ思案をめぐらしてたすけたべ」と涙をながし頼みける。

（『以呂波物語』）

『以呂波物語』の実線部を、享保四年板本は「適宜省略」（先引『近松全集』第十七巻）しているようだが、それら省略箇所は奥浄瑠璃本でも同じく見られない。また、『以呂波物語』が金吾の女房から金吾への言葉とするもののうち破線部だけ、享保四年板本は、逆に金吾からその女房への言葉としているが、その点も、奥浄瑠璃本でも同じである。そして、右引箇所全体が、奥浄瑠璃本と享保四年板本とでほとんど同文になっている。奥浄瑠璃本は確かに、享保四年板本に依拠したものであるに違いあるまい。

奥浄瑠璃本の四段目の終わり近くには、

され共、「人にさとられてハかなわし」と、「誠に汝ハ、幼よりの由ミとて、主の命に替らんとハ、しほらしやと、

いかに太刀取殿、水からこそハいろはのまい」と、互に論ひ給ひける。

(27才L3～L7)

と見える。自らが各人のいろはの前であると、いろはの前と金五（金吾）の女房が「互に論」っている場面であるはずなのに、二人が互いに主張する形になっていない点、不審である。そこで、享保四年板本の対応箇所を確認するに、右引実線部が金五の女房の言葉であり、そのあとにも同女房の言葉がさらに続いて最後に、「あの物」Ⅱいろはの前を「早くかへして給はれや」と太刀取に訴えている。そして、その直後に、「いろはの前聞もあへず」とあつて、今度はいろはの前の言葉が、「いや汝こそ……替る心ざし、のふ太刀取殿、水からこそハいろはの前」と続いており、奥浄瑠璃本の右引波線部は、いろはの前の言葉として出てくる。享保四年板本の該当箇所、七丁裏の三行目と四行目を見るに、

……ほらしやいかに太刀取殿あの物は

……替る心ざしのふ太刀取殿水からこ

と、金五の女房といろはの前の言葉に共通して見られる「太刀取殿」が、連続する行の左右の位置にほぼ並んでいる。そのことが要因となって目移りが生じれば、実線部から波線部へと繋がる奥浄瑠璃本の右引本文が派生することになる。それは、奥浄瑠璃本が正に享保四年板本に依拠しているということを、端的に裏付けていよう。

奥浄瑠璃の諸曲は、若月保治『古浄瑠璃の研究』第四卷（桜井書店、昭19）収載「仙台浄瑠璃と古浄瑠璃」において四種に分類されていて、それが浅野建二『日本歌謡の発生と展開』（明治書院、昭47）収載「御国浄瑠璃の伝承について」以下に受け継がれているが、その四種のうちの「古浄瑠璃中心の曲」「古浄瑠璃、又は其改題、改作、若しくは古浄瑠璃を奥浄瑠璃化せるもの」に、右の奥浄瑠璃『弘法大師之御本地』は分類されることになる。また、例えば、阪口弘之「奥浄瑠璃」（岩波講座歌舞伎・文楽第七卷『浄瑠璃の誕生と古浄瑠璃』、平10）が、「奥浄瑠璃全般を見渡すと、その多くは中央から移入された曲目である。しかもそのほとんどが板本に依拠するのである」「現存本の中には、天理本の『伏

見常盤ゑほしや源八』や『らいがうあとのろん』のように、濁音表記や用字法に奥浄瑠璃の特異さは認められるものの、それらを除くと、江戸六段本をそのまま引き写した如きテキストも残存する」と説くが、右『弘法大師之御本地』も、「うろこかたや孫兵衛板」(先引刊記)の六段本、すなわち中央の板本である江戸六段本に依拠している。

ただし、依拠した古浄瑠璃との距離が様々であることなど、種々検討がなされており、先出『奥浄瑠璃集 翻刻と解題』収載林久美子「奥浄瑠璃のテキスト」では、「板本系統の写本」が「板本との距離を基準に」、右引中の天理本『伏見常盤ゑほしや源八』のような「板本に極めて忠実な写し本」を「その一」として、三つに分類されている。では、小稿の取り上げる『弘法大師之御本地』の場合がどうであるのか、以下に確認しておきたい。

先に引用した四段目冒頭箇所に限っても、「かくて」(享保四年板本)↓「かくで」(奥浄瑠璃本)、「きゝて」(享)↓「きゝて」(奥)など、カ行音・タ行音の濁音化が見られるが(傍点部)、そのような濁音表記は同箇所に限らず全面に認められる。また、先引箇所以外には、「他人さへ」(享)↓「他人さい」(奥3オL4)、「ふりかへり」(享)↓「ふりかいり」(奥10ウL6)、「御前」(享)↓「おんまい」(奥42オL4)、「くも居」(享)↓「くもゑ」(奥20ウL4)など、イとエの混同も、全体的に多数存する。これらは、奥浄瑠璃本にしばしば見られる、口語りが関与した結果、東北方言が反映したと覚しい事例である。その他、「立わづらひて」(享)↓「立笑で」(奥11オL1)、「さい前よりの有様」(享)↓「さゆわいの有様」(奥12オL5)、「いの字」(享)↓「命」(奥22オL5)など、口語りに伴う訛伝の類と見られるものも少なくない。

「しらぬ良」(享)↓「しぬ顔」(奥11ウL5)や「太刀のさやち」にそまつて」(享)↓「太刀のさやにそまつて」(奥17オL2)など、口語りに際しての脱文だろうか。それとも誤写の類だろうか。「わらはかて習のし匠」(享)↓「手ならひのし匠」(奥3オL5)、「すさまじくもまた有かたし」(享)↓「すさまじくも有かだし」(奥7ウL2)、「に

つたうの便せん」(享) ↓ 「便せん」(奥19ウL1)、「先かたはらに引すへる」(享) ↓ 「引すゑる」(奥25ウL5) といった事例も、散見される。先出『奥浄瑠璃集成(一)』に載る真下美弥子「奥浄瑠璃テキストの性格」は、文化五年(一八〇八)写奥浄瑠璃『梵天国』を酷似する説経江戸版と比較し、『とぶらひ』『三がいどうじの』『いんゐの』等をはじめとする、小さな単位での語句の欠落」する傾向について、「中央の正本が奥州に入り、そのまま真似て語られていくうちに、詞章の上に細かい欠落を生じていった過程が想像される」と述べるが、それと同様に捉えていいものだろうか。あるいは、意図的に省略された場合もあるだろうか。

さらに、先に掲げた四段目冒頭箇所<sup>1</sup>の波線部、「参らせよ」(享) ↓ 「参らせん」(奥) というような相違も、数多い。例えば、「思ひをかなへん」(享) ↓ 「思ひをかなふべし」(奥2ウL3)、「悪行」(享) ↓ 「あぐきやぐ」(奥14オL7)、「おとがめおもふして」(享) ↓ 「おとがめかうむり」(奥21ウL2)、「取にかせし」(享) ↓ 「取にがしたる」(奥26オL5)、「太刀」(享) ↓ 「刀な」(奥27ウL7)、など。また、享保四年板本にない字句が新たに加わった事例も、「山しろたへの雲」(享) ↓ 「山しろしろだい雲」(奥9オL3) のような衍字の類らしきもののほか、「今の世」(享) ↓ 「今の世にいだるまで」(奥22ウL5) ↓ 「6」、「かくとはしらで」(享) ↓ 「かくて、かぐどハしらで」(奥25オL1) ↓ 「としやをふくみ」(享) ↓ 「しとやがにとしやをふくみ」(奥31ウL5) ↓ 「6」など、見られる。

以上はいずれも微細な相違と言うべきだろうが、必ずしも微細とは言いい切れない相違も認められる。母の前で、兄の熊丸が弟の光照に斬ってかかる場面、享保四年板本では、

は、上はみててるに打おほい、「にげよ、光照。やれ迹よ」。「いや、我うたれん」と母をおほひ、互にいとひいはれし。

とあり、『以呂波物語』でもおよそ同様である。ところが、奥浄瑠璃本では、

母上ハミつてるに、「にげよ」と声かげる。光てる、「いかッわせん」とおもいしが、母上、此由見るより、「光てる、やれ逃よ」ゆう。「いや、我うだれん」と母上をおもい、互にいとひいとはれし。  
(15ウL3-L6)

となつてゐる。実線部と波線部の間に破線部が入つて、躊躇する光照の心情が加えられているのである。

これらを総合するに、先に挙げた林「奥浄瑠璃のテキスト」による三分類に当てはめるならば、奥浄瑠璃『弘法大師之御本地』は、「その二」の「板本写しでありながら用字を変える以外に、訛語の認められるもの」に該当しつつ、「その三」の「板本に依拠しながらも、意識的に表現や内容を変えるようとしているもの」としての側面も有していると言えようか。山田和人氏に、『以呂波物語』のほか『弘法大師出世之巻』『弘法大師誕生記』『日本九ほんのじやうど』といった「大師物浄瑠璃」についての一連の研究があるが、<sup>(2)</sup>『以呂波物語』を「適宜省略」(先引『近松全集』第十七巻)して成った享保四年刊行の江戸六段本に依拠したものでありつつ、訛語など認められるうゑに「意識的に表現や内容を変えようとし」た面も見受けられる、奥浄瑠璃『弘法大師之御本地』には、大師物浄瑠璃の末裔というべき位置付けを与えることもできるかもしれない。

# 注

(1) 最近の井上勝志「奥浄瑠璃本の依拠本としての六段本——佐藤理作(利作)旧蔵書から——」(『神女大國文』27、平28)なども参照。

(2) 「井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』について」(『近世文芸』43、昭60)、「洛東遺芳館所蔵井上市郎太夫正本『弘法大師出世之巻』」(『同志社国文学』30、昭63)、「『以呂波物語』の特質について——大師物浄瑠璃の流れに即して」(『同志社国文学』31、昭63)。前二者は、山田和人『洛東遺芳館所蔵 古浄瑠璃の研究と資料』(和泉書院、平12)に再収。



【翻刻】（基本的に通行字体に改めると共に、句読点や引用符を私に施した。宛字や脱字など元のまま。半丁の終わりに「（1オ）」などと記し、それ以外の行末を「／」で示した。本文右脇の「一」は、本来ある区切り点。□は判読不能箇所。不審箇所には（ママ）と傍記したが、決して網羅的なものではない。」

いろはにほへとちりぬるを、わかよたれそつねな／らむ、うゐのおくやまけふこえて、あさきゆめみし／ゑひもせす。さむれば、此ミそぐせひるニ、今此／み世に時ゑだり。爰に仁王五拾代くわんむ天王／御時、藤原のきん達に、う大将熊丸、しやていさ／中將ミつてゐる、御前しかふまつる。大玉水てゐるを（1オ）召れ、「それ我国ハ神国にて、仏法共にゆづうし、／何にふそぐハあらね共、中くわしうゑぎのひせう、／いまだ日本に來らず。汝いそぎもろこしに渡り、／ならいゝゑて帰るへし」とちよくちやう也。水てゐる／承り、「昔よりもろこしゑ御使を立らるゝ事、き／りやうをゑらまるゝと承りしに、しやぐばいの／某にけんとうしを仰付らるゝ事、家のめんぼぐ、（1ウ）末代のほまれ、悦びおんうけを申さるゝ。／爰に中后のうゑわらに、いろはの前とて有ける／が、光てゐるに心をかけ、「い国ゑ渡り給ひなほ、いよく／恋わかなふまじ。とゞめばや」と思召、「誠や、唐わ大／国と承り、日本ハ小国にてちゑせばしとて笑と／承るに、此度光てゐる殿を遣され候事、我朝の／はぢならん。ぜひ思召とまり給へ」。熊丸ハひごろ（2オ）いろはの前に心を玉づさ送れ共、もとより／光てゐるに心をよせ、ついにへんじもあらざれば、／「光てゐるをよろこし遣し、あとにて思ひをかなふべし」／と思召、「のふ、いろはの前、そうもんハ尤也。いにしへあべの／仲丸とどうして、やばだいのしをよミ、日本ゑ／名をあけしとかや。いがに光てゐる、君のおん目かね／上から某を指おかれ、かゝる大事のけんどうし、（2ウ）有りがだきちよぐでう、罷立てやういせよ。いろはハ／なおもな残りをおしミ、「あしぐぎ、給ふぞ。昔よりいそぢい／この老人をそハさるゝと承候。つゞやはだちの御方／はんりの浪にうかべんハ、他人さいいとふしぐに、／御身ハ兄也。さゆわい手ならひのし匠、どうしの雲／かないぐどどうの望あり。是を遣さるべし」。なおく／とゞめそうせらる。熊丸いかつて、「やあ、いろはの前、（3オ）其方、くう海がちゑに光てゐるがまぐべきが。／もろこしのひミつを日本ゑ伝る事、



天下の／吉さう。じやまを云ねてんまのしよい。君のりん／げんなり。光てるハ御暇いとまなひ衣、もろこしふね／のとも綱つなの長きか  
 いろときこゑける。爰に／しやぐの空海くうかいト申せしわ、讃岐の国たとの郡、父のせ／しやうハ讃岐氏さいぎし、母ぼんそうを夢にみて、ほう（3  
 ウ）ぎ五年に懷妊だんせう有。日比につどうの望有しが、／けんどうし光てる出船とつぐるより、なんでう／みかどよりおんゆるしをあ  
 らすとも、むたいにかの／とにびんせんし、我本望とぐへぎと、跡をしとう／て追がげ行。去程ほどに光てるハ、大船のしつ／らわせ、  
 高さこの浦に付給ふ。かゝる所に空海／わ、いぎをかぎきればしり付、「のふく其舟（4オ）しばらく。我ハ空海と申しや門なり。  
 く／ぼう、為につどうの望有。ひとゑに頼」と有けれハ、／大将光てる聞給ふ。「みかどより仰にて、につどう／の人数極れば、叶ふ  
 まぢ」ト仰げる。空海ご／しあん有、「其義ならば、ほつかいの地迄書状／壺通とゞけたべ」。せん中にて是を聞、「もろごし／ゑ  
 文とゞげよとハ、にぐぎ云分やな。ふりミン」と、（4ウ）「是迄御坊ハいがにもとゞげ参らせん。これ迄持／てきだられよ。たゞ  
 し、それにてかゝる、か、然らハ／是に遊バゼ」と舟印ヲ指出すに、空海御らん／じ、「是くつきやうの所望、我につとうの時  
 きたれ」と、／人さしゆびをのべ給へば、忽ちきくわうかく／と／浪にあらわし、龍の字舟印にうつりしかば、／せん中壺ど  
 にきもをけじ、扱もふしきの（5オ）名僧とて、あつとかんする計なり。光てる／見給、「是御坊、此龍の字にてんなきハ、い  
 が／に」とゆう。「それわ、御へんだちわめいわぐせんが／せうせうさに、わざとてんわひかいだり。望ならバ」と、浪に打テや壺  
 てんにうつるとひとしく、／龍と也。しんどうらいでんいなひがり、しや／ちぐ雨を吹立る。舟のきわに吹上る。「ゆる（5ウ）  
 したまい」とこい／くに、手合せてぞらいはい／す。空海由を見給、「出々しづめ申さん」と、／舟に打のらせ給へば、浪風し  
 づがに也。光てる／しんど／浅からず、「後日のとかめハともかぐも、此／上もろごしゑおぐり参らせん」と、いにやうかつか  
 うヲ／諸共に、心にまかせはじり行。かぐて空海、／長あんの都にいだり、大はぐ山ママのそばつだゑ、（6オ）清龍山に入ぬれば、「む  
 かふに雲くものたなひぐわ、／文じゆのしやうどなるらん」どふミそめたまい、大／なる黒雲くもさしかゝる。さすがの空海あぎれ／はて  
 「ねがわぐわ三せう十二ぶ経、我心にう／たがい有。正ぼうをしめたまいや」と、一しん／ふらんにきせい有時に、ふしぎや、

いきやう花／ふり、おんがく聞ゑ、有がだや、文しやうほさ(マ) (6ウ) つひかりをはなちゑうかう有。「かひぐゑ／ともにちぎりしかい有て、今汝あいミつる。昔、ひ／ろしやなせそんひミつしんごんのいんをむすび、／ごんかうさつだふそく有。今又なんぢさづぐる／なり。こんだいりやうふの大ほうひほう、／本土ゑかへり国がいにつたへよ。四かいあんた／いなるべし」との給ふ御声の内よりも、(7オ) しやぐひやぐ二つほだんの花大きん、りきん／のしゝのいきおい、すさまじくも有かだし。則、「此／し、にのり、汝がほんとにかいれ」とて、とつこ／さんこれいほうを空海にたび給ひ、けす／がことぐにうせ給ふ。「こハありがだし」と／らいはいし、しんへんぢざいのしゝにめし、／よるひるのわかちなくあゆミける。かゞ(7ウ) る所に／向ふより、老僧ほつすたづゑ／立出、「我はけいびんはんにや三ざうなり。／汝、しん言の誠にゑだらハ、印をあらわせ。／いかに／／との給ふ時、空海しはらくわんね／ん有、まなくをひらき見給へば、あぢの／壺たうを被下しせうしをさる。ねはんまた／きると、十二字のめうもん木のあらわれ(8オ) たり。三ぞうくわんしと打ゑミ、「をゞよいかな／／」とさつぐる経のミやうだい、我が名も／則大はんにや。はんにやじほんじのちゑヲ／いふ。ちゑ則文しやう也。「見よ／／」との給ひ、光り／をはなしうせ給ふ。此光めうにひかれつゝ、しゝ／わいよく力ゑ、こくふはるかにかけ行。国々／嶋々せん万里の浪ぢをも、じんづう(8ウ) ちからに行みぢわ、ミぢかぎあしのつの国や、／あゆめば河内、かかれバいづミ、うしろハやまと、／是ぞ山しろしろだい雲を分、しゝハとひおり、／南にかけ北にはしつて、たわむれの花の白露、／きさらぎや、その、こてふをおつたておつめ、／かしらをふつてまいめぐる。廻て東山、谷／うかかふて失にける。今の世迄も此谷、(9オ) しゝが谷とハ申也。「きやてい／／はらきやてい、／はらそふきやてい、ほんぢそわか」とおカ／まぬ人ハなかりけり。／

## 二たん目／

きのふ云けふと暮、光てるきてふあん□／に、ゑぎのおんこうをつたえ、まつ書残らず取／持せ、急ぎさんだい申奉る。天王ゑい(9ウ) かなのめならず、中納言、左中將ににんせら／れ、おんとまたびにけり。兄の熊丸ハ、「何とぞして／いろはのま

へを手に入」と、いろはの前のやがだに／行、しばがぎに立かぐれ、事のていをぞうががける。／いつぬれそめし初恋の、まだて習のいろはの前、／ゆかしさむねに光てるの、思ふバならて、思ひ／もせぬ、なまいやらしき熊丸が、しみしだた(10才)るぎよこれんば、すぢなぎあだなはつと／立。雲ゐの内もわびしぐで、めのとがゆがり有す川、／花ちる里にしのはせで、うさをなぐさみ／おわします。かゝる所に光てるハ、つりさおのふし／たる魚<sup>ウツ</sup>見<sup>ま</sup>給、<sup>まい</sup>「是にあつまる魚<sup>ウツ</sup>見<sup>ま</sup>よ。つらで／ゑごぞ」との給ふ声に、姫君はふりかいり見給ふに、／恋しとおもふ光<sup>マツ</sup>て也。こわそもいかにと心わ(10ウ)せぎ、立笑<sup>タテウツ</sup>でためいき<sup>マツ</sup>つき、ならば、しりより／さおに取付しがど、取て、「是わらわにことほりなしに／なせつらんす」とがめながらも、ながしめに見／とれて杜ハおわしけれ。光てる兼てより心<sup>ココロ</sup>かゝる／つりのゑん、よぎしをとハおほすれと、わざと見／しらぬふりをして、「扱々せつしやうきんだんの／所とハ存ぜず。近比そつじ御免なれ。然らば(11才)魚<sup>ウツ</sup>ハつるまじき。」「いや、おのさまにとがめられだ／わとがわなし。此つりさおごぞ、とが人なり。」「其義なら／ば御そぶんに」と、さおゝすて、にげんとすれバ、引／へめ、<sup>と</sup>「扱にもぐいや、水からを御みわすれハ有まじき。／いつ迄ぐさのしぬ顔、文はたひく送れ共、一ど返事／もなされぬハ、とがぐしねとが、しんでのげたや」と／すがり付て、ぐとがる。光てるも心こぼれて、(11ウ)「いなにハあらず。もしやわがげとうかふて、すぎ／ゆぎし事のきのとぐやと、是よりしてハ七生も替／らじ物」ど身をよせし。にゐむつことこそやさしけれ。／しのびゐたる熊丸ハ、此ていを見よりもつ、と出て、／「是、光てる、さゆわいの有様、君のけんゐをかふに／きて、某にもいとまをこわす、あまつさへふぎを／なす事、きつくわいなり。七代迄のかんとうぞ。(12才)罷立」といかりける。光てることバなく、「只何事も／御免あれ」と、さしうつむいておわします。熊丸いよ／いよかすにのり、「はや／そこを立され」と、とんでかゝれ／バ、姫君ハやがて中へ立へたり、「のふ、御身計す／しぐで、いやはやおかしいゐげんだて。大方にして／おんかいりあれ」。熊丸はつだにとらミ、「やい女、あしぐ／依てけがするな」とつぎのぐる。姫君ハにぐさも(12ウ)にぐし、「はぢをあだゑん」と、めのどにいひ付、熊丸が／す年送りし玉づさを二三百取出し、「のふ、光てる様、／是ハ、あのせうのよき兄

さまより、みつからに付られたる状文なり。わが恋叶バぬはら立に、ミだれ顔の／わんさんかやせうしぐ候なり。只今かいす。受取」と、／はらり／どなげ付られ、熊丸めんぼぐ失て、「此上／ふんへつ有。今に思ひッしらせん」と、「ちぐ生め／」と（13オ）我が身のあぐハしら犬の、にげぼへして帰／ける。爰に、かの兄弟のはゞ上ハ、めうしやぐせんにと／で、こがどの丸におぐれてより、ひむの谷に引こもり、／後せのいとナミ計にて、月日ヲかそへおわします。／然るに、光てる、もろごしよりのミやげどて、名作の／ミろぐぼさづを参らせたまへば、母上御悦ひ限りなく、／ともしびかぎあげておわします所に、熊丸わ（13ウ）大あせにてつと入、ち仏だうのミろぐぼさづをおつ／とりてにはになげ、物をもしわす、大いきほつとつぎ／ける。母上げふさめ、「くま丸、御身ハきがちかふたが」。／「おふ、きがちかはんもしれ申さん。扱も光てる／めハ、げんどうしをうげながら、唐へわゆがす／して、おん国へはいぐわいし、かミをかすめ、御おん／せうに預り、様々のあぐきやぐ、今にせんぞのなを（14オ）くだし、親兄の首になわを付ん。此仏も／何所ぐの山の木柱か、名作とからし。とかぐハなんぎ／のでぎぬまにこがんだう遊せ、上江うつだへ官位を／はぎ、る人となして然るべし」と申ける。母上ハ／涙をながし、「ゑゝ、あさましや。光てるにおいてハ、／さやうのあぐ心有物ならず。人のそねミと覺江／たり。又、若き物なれハ、すこしのとがの有とて（14ウ）も、兄弟あけんをくわい申へし。仏にとがわあ／るやうに、もつだいなや、ゆるしたまゑ」と手合、仏ヲ／そない念仏してゐたまひば、熊丸身もたへ／腹を立、「聞入もなきおいほれ、何云てもばり／あいなし。此上は、光てるめを首ねちきらん」と／とひ出る。「のふ、かなしや。御ミハ天魔が入けるか。光／てるをころさんより、わらハをころせ」となきさげ（15オ）ぶ所に、光てるハ御見まいに来らるゝ。熊丸／きつと見るよりも、「やあ、おのれめ待だるに、しに、来／／のがさじ」と、とんでかゝるを、母上ハミつてるに、「にげよ」と／声かげる。光てる、「いかゞわせん」とおもいしが、母上、此由／見るより、「光てる、やれ迹よ」ゆう。「いや、我うだれん」／と母上をおもい、互にいとひいとはれし。あぐきやぐ／ぶ道のくま丸ハ、「ゑゝ、めんどうなり」と母上ヲ引（15ウ）よせ、二力指ころす。光てる、「是ハ」とぬぎかざす。／親のかだぎと打てかゝる。「心ゑだり」と、くま丸ハ、

／大刀ふり切てかゞり、光てるにさん／と手ヲおわせ、／行ゑもしらず落て行。光てる、心ハはやれ共、／すが所の手をおい、「むねんやな。おのれ、何ぐゑの／がさん」とおぎあかれば、どうと伏、たちをさか手ニ／つきながら、「ゑ、口惜や」と、いかる心を力にて、(16オ) よろばいなおからおふてゆぐ。熊丸が／あぐきやぐ、にぐまぬ者こそなかりける。／

### 三たん目／

去程に、いろはのまへ、くま丸がことハわ心元無／有つるゆへ、只事ならずと忍び出、やばん斗／只ひとり、は、のやがたに行たまへば、門を入、／よふけ人もしづまり、つまと／わ皆あぎ(16ウ) だり。母上のおんしがいいあげになりて、ふし給ふ。／「なむ三ぼう」。光てる卿のうわぎお打かけ、太刀の／さやにそまつて有ければ、姫君おとろぎ、「扱ハ、熊丸／めが、光てるさまを御らうばさまへ、あしさまにい、なし、／それを誠と思召、こハあけんなされしを、若げ／のたんぎ、こらへなぐ、は、うへを此ことぐに打／のき給ふにまきれなし。おやをころして(17オ) 逃給ふ共、終にさがし出されて、見せしめに／あい成るハ、めのまへなり。しよせん水からつぐり／きぢがいと也、わらハが打しともてなさバ、人ころ／じとて我をがいし、つまのなんハあらじヲト／しあんを定、かみなしミだし、守り刀ぬぎ／給ひ、老母のしがいのちをぬりて、屏風障子／打たゞぎ、さま／物にくるばるゝ。つきふしたる(17ウ) 女房立、「何事やらん」と指のそぎ、「のふ、おぞろし／や、女のきちがい来り、御あんきふ様をかいせしそや」／と声立る。下人共おとろき、ほうを引さげ／たゞぎふせ、たがての縄をかけにける。姫君、され／共、思ひまふけし事なれば、心ニろまの事／ともを云ちらし、ないつ笑てくるハるゝ。「先、おん／兄弟の御方へ人ハはしらせよ」といふ中に、「お(18オ) 家のちじよぐ、さだするな」。人屋の本江引立／ゆぐ。哀也ける次第なり。かぐて、熊丸ハ、身を／かくすへぎ所なく、師匠と頼むさいじのしゆひん／のもとゑ行、もんあらげなぐたゞぎ、僧正出合、／「こハ、あハたゝしきふぜい、きつかいしや」と有ければ、／「さん候、弟光てるが、悪心にて母をがいし、あまつ／さゑ我をも追かけ来る也。万事頼申也」。(18ウ) しゆびん由を聞、「光てる是へ来るござ、さゆわい／なり」。下ろう共云付、「打ごろせ」と件いける。かぐと／わしらて、

光てるハ、あけにそミ、ち刀ふり、跡を／おふて来りしが、「なむ三ぼう、見失ひし。今迄が／げの見えけるが」と、しゅびんがもんにて手を、「某／わ親の敵を追かけ者也が、いきぎれて候へば、水一ッ」とよバ、りける。下人共聞より、「我打取らん」とあら（19オ）そふ所に、空海通り合見給ば、便せんせし／藤原光てるなり。はつと思召、見しらぬ顔にて、／「御出家立、定めて此者とが人ならめ、ミすてハ／通られす。愚僧に命給ハれや」。下僧共聞よりも、／「重いさ云、僧正より仰なれば、叶はぬ也」。「去年僧正／も御出家、人をたすげて、おちとにバならじ」との／給ふ中にも、老僧つゝど出、「わ僧ハ空海よ（19ウ）ないらざる所にりぎミ立。たすけぬ時ハいかに」。／「お、其時ハ、ぐ僧があいてよ」。「して、あいてならん／に、むとうにてハいがに」。くうがい打笑いて、「我しう／にハあち一どうとて、此むねに有。いがに若物、／我がでしにする上ハ、心やすぐ思ゑや」と、衣のすそ／を打がけ、さあらぬていにミへ給ふ。しゅびんい／かつて、空海共に打取んと、がうまのり釵を打付（20オ）れば、ふしぎや、こぐふに龍あらわれ、釵にとび付、／切さぎくわへまいだりけり。くりからふどう、是ならん。／しゅひんを初、悪僧共、「おそろしや」と逃入ば、／龍ハくもゑによぢのほる。「お、さもさふづ／」と／光てるを友ないて、「ミつ法をさづけん」と打つれ、／かうや山ゑのぼらるゝ。是ハ扱置、いろはの前、／川村きんごにあづけられ、あやしのろうに（20ウ）おしこめられ、明暮に、くうかいよりさづかりし諸仏／ぼさつの真言を、毎日一万べん光明真言をと／ない、「けふや打るゝ、あすやさいい」と思ひねの、／「光てるの行ゑ、いがに」とおぼつがなく、きん五ふう／ふがいたはりて、窄のそとに立より、「誠に人おふぎに、某／が預り、うきめを見せ参らする事、せびなぐ／候。我義よう少の時、おふち秋より公に召つかわれ候。（21オ）其いにしゑを存れば、正し／ぐおん主すぢ、身にかへて／たすげ参らせんと存ずれど、おとがめかうむりしわ、／近日しぎいとの御事也。思召事候はゞ、夫婦に仰付ら／られ」と、泪／ながし申ける。姫君も涙に暮、「御／ふうぶのおん情、いつのよにがハ忘るへき」と、守り／袋より巻物一くわん取出し、「是ハ、空海御伝受の／いろはがな云物也。それ、わ国の万ようかな、（21ウ）女共習ひゑす、一生むひつにてくらすゆへ、くうがい／是をかなしミ給ひ、八万よ経の其中に、ぼんし／かんじ、わじ、天じ、

一百おぐのほんじをかんがい、四十七／ゑらミつゝ、まつせの宝となし給ふ。人の五ゐんハおふけれ／と、四十七字の外ハなし。先命ハ二天、父母、くわご、／ミらいにもたとへたり。又、日月、こんだい両ぶ／大日如来、其外一字一てんにも、皆、仏た<sup>ミツ</sup>いヲひやうす也。(22オ)いろはよりよミ出し、ゑひもせず迄よミ終、むせう／をしめすさとの哥、仁義五常生死<sup>かうせ</sup>ほだい、皆、此／中にこもりたり。よぐ習ひゑて、しそんに伝へよ。／涙<sup>なみだ</sup>なからに渡さるゝ。夫婦あつとおしただぎ、／かんない袖をぞしほりける。此時より今の世にいだ／るまで、しらぬ人なきいろはのミぢ、やミをてら／せるちやかう玉、めてたぎ宝の始とかや。きんこふ(22ウ)夫婦下されける。見るきぐ人もおしなべて、／あつとかんするはかりなり。／

#### 四たん目／

かくで、川村金子バ女房をかたわらにまねき、「あの／姫君ハ、人間にてわおわすまじ」。女房きゞて、「けにや、水／からが現世、ミらいのしせうぞや。師匠のおん有故／に、親のおんおもしろとかや。ミちをならひて、道<sup>ミチ</sup>(23オ)立ずハ、ちぐるいなり。其の上、おん身の御しう／筋、何とぞたすげ参らせん」。金五聞で、「我もさ／やうに思ふなり。さあらバ、おとしもふし、我々夫婦／も跡<sup>あと</sup>より、何方ゑも立のかん」。「いや／姫君、我々が／身のなんぎおさつち、よも『おぢん』とわの給ふまぢ。／すがしでおとし申べし。ろうの戸びらヲおし／あげバ、「扱有かだぎ御<sup>ご</sup>じんこてせう、生々世々(23ウ)此御おん、何どぞしておくらん。此へんれいに、三日／が内にいとまを申也。いか成寺ゑも参らせられ、／御さいごのらいかうを頼ミ給へ」と云けるが、姫君悦び、／「然らハ頼申也」と、きぬヲ引かづぎ、表を指て出給ふ。／夫婦ハ跡を見送り、「さあ、何方ゑおぢゆかん」といふ／所へ、こぐやのとねり大音上、「いろはの前のさいごなり。／姫を引て渡されよ。金五、はつとあぐみ、「今ハはや(24オ)是迄」と、すてにじがいと見ゑしを、女房取付て、／「金五殿、とてもしぬき命なり。見る者も有ま／ぢ。わらバをからめ、渡されよ。いかに／」と云ければ、／「ゑゝ、男にまさる我妻よ」と、刀<sup>やま</sup>及はず、女ぼうに縄／打かけ、めをおしのこい跡に付、けいごにまじわり、引ハ／渡ハ、めもあてられぬ計なり。た刀取判官もり／定、六条原<sup>ろくじょう</sup>に出向ひ、大まぐ打せ、かきゆわせ、兵



ぐひつ(24ウ)しと立ならべ、「めしうどおそし」と待<sup>マ</sup>めだり。かくて、／かぐどハしらで、いろはの前此所をとおりけるか、もり／定<sup>マ</sup>是<sup>マ</sup>見て、「らうせぎ物、のがずなよ。しらぬ事ハあ／りつらん。けふハ、いろはのまいと云とが人の、せいはい／のにわ成に、ゑんりふなぐふミこむハ、いが様<sup>サマ</sup>くせ物。／なのれ」。姫君はつと思召、「なのりてやよからん、なの／らんとやか<sup>マ</sup>ござん。いや、ちんじても、金五かためあ(25オ)しがりなん」と思召、「いや是、のふ、かだ／、何とぞ／のがれはやと、ろうハしのび出けれど、つミのがれん、／浅ましや。我社<sup>□</sup>ハ、いろはのまいぞや」。「扱ハ、金五がゆ／だんじて、取にがして有けるよ。それ、からめよ」と、／縄をかけ引すゑる。人の命に替り行金五ハ、そバ／をはなれ<sup>マ</sup>ゑす、さいごのなごりおしめ共、互に人め／忍びつ、めを見合する計也。「このごろ辻／にて(25ウ)人をころせしとが人」と、たからかによハりて、やり／長刀の日にか、やぎ、人立あまだ見ゑければ、「もはや／さいこ近付ぐ」ど、なミだなからに、六条のかわらのおも／てに付ける。判官森定ハ、金五を待がね出向ひ、「是々／わどのわ取にがしたるいろはのまい、某からめ取だ也」。／金五、はつどおどろぎしが、むね<sup>ラ</sup>しづめて、「やあ、／是ハ先、御べん、いろはの前見しり給ふ」ととゑば、(26オ)「いや、顔ハ見し<sup>マ</sup>らずねど、我身よりなのるからハ、いろは／の前<sup>マ</sup>にまかいなし」。「それハ、其方のそこつなり。外より百万人／なのる共、いろはの前ハ只一人。是、みられよ」と引出す。森／定きもおげし、「して、其方が、ちつぜういろはの前が」。「いや、／そでなき物がとが人どて、諸人におもておさらすへぎ／が。近頃そさうな人かな」ど、あさ笑ての給へば、「それも／三<sup>サ</sup>ふ、しかどいろはの前が」。「ばて、くどゑ事。我となのり(26ウ)出るうへハ」との給ふ。森定聞て、「しふせん兩人共に／せいはい」ど、貳人一所に引出す。顔と／見合、「是ハ」といふて、泪に暮。しばしきへ入なげがる、。され共、「人に／さとられてハかなわし」と、「誠に汝ハ、幼<sup>ハ</sup>よりの由ミ／とて、主の命に替らんとハ、しほ<sup>ラ</sup>らしやと、いかに／太刀取殿、水からこそハいろはのまい」と、互に論／ひ給ひける。太刀取、今ハあきればてゐだり(27オ)ける。金五しあんじ、「是々森定、とが人ハ某が預り／し。いせんの女をたすげよ」と、立よりなわおとかとんとす。／「やれまて、金五。此兩人くせ物に極りたり。貳人一度に／かいすべし。汝、其女切。我れハ

かれを打べし。「お、／尤」と刀ヲぬき、森定姫の後ニ廻り、金五ハつまの後ろ／に立、「さあ今なり」とふり上、森定が両手ヲ切、かへす／刀にて首打おろし、けいこの者共おつちらし（27ウ）人々の縄ヲおしぎり、いろはの前を方（マ）にかけ、つまの手ヲ／引、落行ける。かのたまよがはだらきお、かんせぬ物／こそなかりけり。／

五段目／

去程に、川村金五ハ姫君諸共、はんにや寺のかだわ／らにしばらくしのびいだりける。姫君の給ふハ、「誠に／夫婦のなさげにて、あやうき命ヲたすかれ共、（28オ）光てる殿にあわぬまわ、いぎて居がいざらになし。とても／情におん行末尋だぎ」よしの給へば、金五承り、「我もさ／用に存る也。只御とんせいとのミ、御在所ハしれす。去年から、／や山こそ心にぐし。あれゑ御供申（トモ）さん」と、女房諸共に／姫君の御供し、よわにまぎれて出給ふ。たとり／て、／今ハわやかうやの山に付給ふ。いたわしや、姫君ハ／な（マ）あぬたびのつかれがや、「あらくるしや」との給ふヲ、（28ウ）夫婦おとろぎ、さま／といだわりて、頼もしや、かゝる所へ／山人共、打つれて通りけり。金五見て、「のふ、此山に今、／とうしんのあんじつをしろしめさバ、おしゑてたべや」。／山人聞て、「たうさんゑほふしの上る事ハ、かすし／れす。女人けつかいの地なれば、かだ／のほる事叶わず。／道心おり／きやうのため、ふもとゑ下らるゝ事もある。／何ほうしと名をさすハ、中々尋あいがたし」と語り（29オ）すて返りける。姫君、いきの下よりも、「夫婦の人々、／かぐ迄尋廻れ共、御行ゑしれぬなり。此お山へハ、／女をいとひ給ふとや。然らハ、此山にまします共、／あふ事ハ叶ふまじ。此上、水からたすからんやまふとハ／おもわれず」との給ふ声もよわりばて、頼ミ方なふ／見ゑける。しがる所に、はだちあまりの若僧、行／にやつれじ姿にて、ふぐのさわおはんにやさ、げ（29ウ）来りけり。金五がつまハ立より、「扱もとうとや、御僧様。／近頃、そつちなから、御年はいかつかうのさも有べぐと／見ゑ給ふ。若中納言光てるさまにて候わぬが」。入道はつ／と思せしが、さらぬていにて、「いや、我ハさやうの物ニて／なし。先、それハ何の爲のお尋ぞや。」「いや、其光てる様／古々（マ）二夜のかり枕、二世迄の御けいやく候らいし、いろは／の前と申女らう也。妻の行へをなつがしく、我々

是迄<sup>ニ</sup>（30才）御供致し候。たびのつかれと恋風に、今をかきりに／ましますなり。哀、光てる様御存ならば、おしへ給<sup>タマ</sup>／われ」と云ける。入道しばし涙ぐみし、「やれ、もつだいわ／なし。ま□ふたり」「扱、哀成心指。ぐ僧も思わず／らぐるい致し候よ。夫に付、其光てるハ、しふ願有て／熊野を引こもり、当山に候はず。当<sup>マタ</sup>のならないて、／古郷<sup>カキ</sup>事ハ、仏のせい言立る故、たいめんハ叶ふまじ。（30ウ）とぐ／つれてかいるべし」との給ふバ、「扱もせび／なぐ候なり。あれ、御らんぜよ」と、ゆびさす方／見給ふに、笠をならべて風ふせぎ、金五がひざ／枕として、今をさいごとミへける也。皆、我故と思ふ／にぞ、「いぞきなりでしかせん」と「爰<sup>マタ</sup>ハ大事、見す／て、かへらふが。いや、此ま、しなせてハ、らいせのまよ／ゑもふびんなり。せめてまつの水なり共あだへ、（31才）三づのやミをてらはや」と思召、「さいわい是に、おぐの／かず地<sup>チ</sup>じやを持合たり。りんじうに此どしやを口入<sup>マタ</sup>／れば、三惡道をまぬかれんかまぬかる、」。立よつて／見給<sup>マタ</sup>に、互に深ぐちぎりし顔はせに、あ、扱昔<sup>マタ</sup>／思われて、先立物ハ涙成り。やう／／心取直し、しとやが／にとしやをふぐミ、衣の袖に水をしめし、口に入し。／「是<sup>マタ</sup>でいもせのまつこの水、らいせハ一れんたぐ（31ウ）せう」どくわん念あれバ、ふしぎやな、夫婦のおん／あい一しんにやつうじげん、姫君かつばとをぎ、「まさし／ぐつまの光てるさまにあふと見しわ、夢ならず。是／ぞ恋しの我つまよ」。いたぎつがんとし給ふをふり／はなし、送給ふ。人々、是ハとけふさめて、よべとさけべと／かいぞなぎ。姫君、今ハ思ひ切たるけしきにて、前成谷／ゑとび入給へば、金五夫婦ふたり、「いがに」とり付、う<sup>マタ</sup>（32才）たいでなく所に、空海、此由聞付給ひ、光てる／諸共さんげ有しが、姫のていお御らんして、「我山に／てじや心<sup>マタ</sup>する事、ためしなし。出／／たすげゑ／させん」ど、つ、出谷<sup>江</sup>とび給へば、有かだや、谷ぞ／よりれんゑうおへ出、空海<sup>マタ</sup>すぐい上、姫ハくざに取付／て、うかみ給ふぞ、ふしぎなり。空海、おんミやう／をむすんで、「いがに汝ら一心せう／成故、心の（32ウ）はちすおい出て、姫が命すくふたり。急都への／ほれよ。空海も此ま、姫を都へともなふ也」との／給ふ内に、れんゑうハ、おのれとこくふへまい上る。／せずな都<sup>マタ</sup>飛行ある。さいちのしゆびん是を見／付、「やあ空海、汝、正ぼうならず、まほう成故、／八きやぐのさい人<sup>マタ</sup>かたふとし、ともにならぐゑ／しづむ。

浅ましや。空海笑て、「つミ有衆生を（33オ）すぐバずして、わ僧ハ何をすぐふ」。しゅびん聞て、「出、其女ヲおとして見せん」と、九字ヲ切かぜける。はつす、中よりほつぎとおれ、姫ハ大地におち給ふ。しゅびんが弟子共、手ヲた、き笑ひける。空海さわがす、「ふぐふせうふげん」と、下也／姫ヲまねき給へば、はちすのくぎより、五色／の糸、雨のごどぐにくり出ず。姫ハ、はす糸ニて（33ウ）くり、くり上く上らるゝ。元のごとく空海わ、／風にまかせてふハくと、三後松の松かけに、／程なくおりさせ給ひける。／

六段目おわりなりだん／

藤原の熊丸ハ、しゅびん僧正にかくまハれ年月を送りしが、弟光でる、いろはの前、空海の御ひけい／にて御前申をさる由、大きにおどろき、僧正の（34オ）前に出、いろくとたんかうず。しゅびん聞て、／くつきやうの事、近年、天下かんはつに付、空／海と某に雨のいのりおちぐでう有。則、／らしやう門の東西にで、行力ヲくらふる也。／空海ハ、雨をいのらん。某ハ、光てるふうとくう／かいヲてうぶぐせん。」「此ぎ尤。こなだへ」と、おぐ（34ウ）ゑ入にける。程なぐ日げん極まつて、とうじ／の空海、さいちのしゅびん、六ゑハしつかうしつ／かいし、ぜんぐのとうじ拾貳人、ゐきをだだして／れき座有。しゅびんハ、だんせうに向ひ、しゅそ／のゐんをむすびける。空海ハ、由を御覽しする、／ゐんミやうのくわん念ことくぐいかいたり。」「扱ハ、きや（35オ）つめハ、此すぎに我をてうぶぐするとミへだり。／おのれがほう力にまぐへぎが。俄にくわん念／改、こしんのゐんむすび、五大そんのほうをせめ／かけていのらるゝ。しゅびんハ、一ぢさんりんの法、／「我おぐれじ」とせめかける。元より両僧ハ、／両よぐこかぐの行者なり。辰のこぐより午の（35ウ）こぐ迄、れい、しやぐちやうハ雲にひゞぎ、たんせうに／火ゑんを吹、こまのけむりハこぐふにたなひぎ、／せめがげくいのらるゝ。ゐんだるじひの明王、／あまりにつよぐいのられて、しゅびんのだん／にわ大いとぐ明王、空海のだんにハかうさん／世明王、光りをはなつてあらわれ給ひ、（36オ）大ひの弓にちゑの矢をはめ、指つめく／いり／給へと、此矢、中にて矢じりく／と引あたり、／ミちんと成てくたげける。くわ

人白御らんじ、／「双方、きねんをやめられよ。扱、方々ハ、大ほう／じの雨ハ一てぎもふらす。天地のしんどう／たゞ事ならず。  
 さつするに、両僧のいせい（36ウ）あらそい、雨のいのりハよそになり、かまんの／しゆそと覚えだり。私のいのりをやめ、と  
 ふ雨／をいのられよ」。しゆびん申よふ、／「空海ハしらす、／わ僧におひてハ、たねんなくち致申せ共、／爰にきの毒にそろ、  
 先年、熊丸の母をころ／せしいろはの前、同光てる入道を、空海の方に（37オ）かくし置。人をがいぜし八逆ざい、わうしやう  
 の地に／すむ故、りうぢんなふじゆなし。急キ兩人を／法のこどくおこなハれナバ、雨ハ早速ふり申さん」。／空海聞召、「いや、  
 しゆびん、夫ハ此方より云事。／光照ふうふハ、其身のとがなき故、いかにもく／僧がかぐまいたり。わ僧ハげんざい、親を  
 ころせし（37ウ）熊丸をかくまいおく」。しゆびん聞もあゑす、／「正しくいろはががいしだるせうこハ、川村金五、二心／にて  
 太刀取を打て立のきしが、ただし、熊丸が／打たるせうこや有」。「お、せうこハ弟光てるよ。／母をがいせし時、光てるにも  
 手おおふせしが、／せうこ」。くわん白の給ふハ、「いろはの前がざいくわの（38オ）かれかだぐし。又、川村金五、めしうとを  
 たすけ／森定ヲ打しざい、光てるハ兄にたいして／ふかう者。何れも同ざいだるべし。それ／」と／の御てう成。抑ちぐ生の  
 るげとは、とが人のいせう／をはぎ、べつニ火にてやきすて、ひいに犬と／云文字を書、東のど門よりおいはられ（38ウ）る、わ、  
 おきてなり。むざん成かな、姫君ハ／おかさぬつミ身に請て、くどき給ふぞ、だう／りなり。光てるの給ふハ、「云わけも立まじ。  
 ／はらを切せてたべ」。空海御覽じ、「げに／なげハしこぐせり。去ながら、其身に／くもりあらされバ、仏神誠にてらし、し  
 るし（39オ）なき事候しじ。よしそれともに印なくハ、／仏法ハ皆偽り。空海だんを下らず、我一宗を／やふるべし」との給ふ  
 声の下よりも、御身より光り／さし、此光明人々にうつりけるぞ、ふしきなれ。／くわん白ヲ始各々、ばつときもヲげし、しゆ  
 びん大／きにせき上り、「扱方／、いな事をたつとまる、。（39ウ）谷のくち木も沢べのほだるも、身ハ光る。／ふしぎハなきに、  
 とぐ／げいをいそかれよ。いや、／たゞ愚僧かおごなはん」と、とんで出しが、立すぐ／み、にわがに狂ひ口ばしり、大地へ  
 かつとはたおれ、／「のふ、あや、だゑかだや。親ころせしちぐぜうの、／かとうどせしミやうばつ、五だいをせむる。かな

しや」と、(40オ) め口よりち<sup>ヲ</sup>はぎ、身もたいしでしに<sup>ニ</sup>ける。心地よくこそ見えける。くわん白大<sup>ニ</sup>き／おとろがせ給ひ、「扱  
 ほうだかふ所わなし。どか／人ハ熊丸め。ぜんだい<sup>ミ</sup>もの大い<sup>ミ</sup>ざいにん」と、／「それおこなへ」と御てう有。「畏て候」と、  
 さいじ／のしゆびんが内より引出す。大勢せんごを取(40ウ) まハし、ひだいに文字<sup>ヲ</sup>書付、いせう<sup>ヲ</sup>はぎ取／やぎはらい、あか  
 はだがにて、ぢぐ生門の戸<sup>ト</sup>／ひらをひらぎ、かい<sup>ヲ</sup>吹、せうごをならし、たい／こを打、おい立／追いだす。実や、つぐせし  
 ／悪ごうの、忽こごうしんどうし、こぐらん四<sup>ミ</sup>がい／におい<sup>ミ</sup>く、こほうのやしやじんあらわれ出、て(41オ) いしやうゑとん  
 でお<sup>リ</sup>、くま丸をひづつがんで、両足取てさつとさぎ、けすがごとくに／うせ給へば、忽れいぶうさつ／ど、兩ハしや／ち  
 ぐ<sup>ヲ</sup>ながしけり。くわん白、くわんぎゆやく／あり、空海をふしおがミ、光てる夫婦を／いさないて、すぐにさんだいなされつゝ、  
 (41ウ) くわんろくいぜんに百ばい<sup>ダ</sup>だり。扱又、川村／金五を召、「汝、夫婦の者共が、情とい、忠孝／と云、其おんせうにバ、  
 やまどの国五<sup>テ</sup>国を下／さるゝ。有がだしどだだよしハおんまい<sup>ヲ</sup>罷立、光てる夫婦の人々ハ御悦ハ限り／なし。彼<sup>カ</sup>空海のおい  
 のりこうほう(42オ) 大師と申せしわ、此空海のおん／事なり。しんごんきやうの御ほうりぎ、／目出度共中ながもふし計<sup>ハ</sup>りわ  
 なかり／けり。／

天保五歳／鳥ノ正月吉日(42ウ)

右之通り書おろしなとわ／御座候間ごすいけやうめされ／おんよみく<sup>ナ</sup>なされ度候

青笹村／ 右衛門(43オ)

\*重ね書きされた箇所が見える。例えば、「ないぐ」(3オL6) ≡ 「ぐ」の上から「い」と重ね書き、「なお」(3オL6) ≡ 「く」  
 の上から「お」と重ね書き、「からし」(14ウL2) ≡ 「た」(?) の上から「か」と重ね書き。

\*幾通りかの振り仮名・傍記が見られるが、「讃岐氏」(3ウL7) は本来あるべき本文「佐伯氏」に基づくものか。また、「御<sup>サ</sup>

ひけい」(34オL6 御庇恵)は、「さひわい」と誤読した結果によるものらしい。

《付記》

門外漢による急拵えにて、甚だ不十分なものではあるが、小稿を、昨年十一月三十日に急逝された故山崎(正木)ゆみ教授に捧げたい。小稿にて取り上げた奥浄瑠璃本『弘法大師之御本地』について、大学院の授業にて、山崎先生が休職を終えて戻られたらご覧頂こうといったことを話していた。思い掛けない突然のご訃報に接したのは、その六日後のことだった。心からご冥福をお祈り申し上げます。